

保健体育科「体育理論」

中・高等学校の体育理論における「オリ・パラ教育」

期待できる効果

●こんな子どもの姿を期待できます

- 運動やスポーツへの多様なかかわり方について理解する子ども
- フェアプレーの精神について理解する子ども
- ドーピングが傾向とスポーツの価値を失わせることを理解する子ども

1 運動やスポーツへのかかわり方について考えよう(中1)

導入では、2012年オリンピックロンドン大会にかかわった25万人のうち1万人が選手であったことを伝え、残りの24万人がどのようにかかわったのかをクイズ形式で尋ね、関心をもつことができるようにしました。

展開では、1984年ロサンゼルスオリンピック大会女子マラソンのアンデルセン選手の映像を使用しました。極度の脱水症状の中、必死でゴールへ向かう「選手」と、それを大声援で見守る「観客」、また、手をさしのべようか、ゴールさせようかと真剣に選手を支えようとする「役員」の映像を通して、三者の心情に迫ることができるようにしました。その後、子どもは「選手」「観客」「役員」という三者の立場に分かれ、それぞれの立場から質問や意見を出し、三者がどのような思いでオリンピックにかかわっていたのかを考えていきました。

まとめでは、自分たちの身近な生活に目を向け、部活動、体育大会等のスポーツイベントにどのようなかかわり方ができるかについて考えました。

2 スポーツへのフェアなかかわり方について考えよう(高1)

導入では、過去のオリンピック大会とドーピングの歴史を紹介し、関心をもつことができるようにしました。

展開では、始めにドーピングとは何か、ドーピングの影響(身体への影響、社会への影響)について学習しました。次に、リオデジャネイロオリンピック大会の陸上女子5000m予選で接触・転倒し、足を痛めても走り切ったアビー・ダゴステイノ選手(米国)とそれを励まし合って一緒に完走したニッキ・ハンブリン選手(ニュージーランド)の映像を視聴し、両者が大切にしたものについて考えました。

まとめでは、身の回りにおけるフェアプレーの精神が求められる場面とふさわしい行動について考えました。



ココがポイントです!

- ①「する」「みる」「支える」の立場から意見を交流することで、運動やスポーツへの多様なかかわり方について理解できます。
- ②オリンピックの勝敗だけにこだわらない場面を視聴することで、フェアプレーの精神について理解できます。
- ③ドーピングの身体への影響、社会への影響について知ることで、ドーピングが健康とスポーツの価値を失わせることを理解できます。

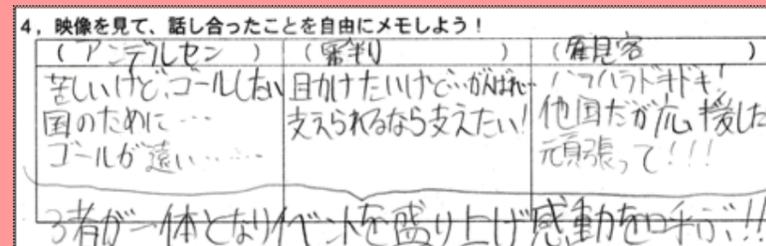
運動やスポーツへのかかわり方(中学校第1学年)



▲女子マラソンの映像を視聴する様子



▼三者の立場に立って考えを話し合う様子と話し合いで考えを深めた学習ノート



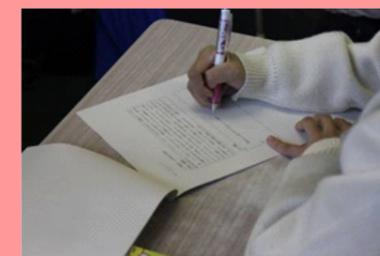
スポーツへのフェアなかかわり方(高等学校第1学年)



▲オリンピックが大切にしたものについて考えている様子



▼自分の考えを発表している様子



▼今後の行動についてノートに記入する様子

実践後の子どもの感想(中学校)

私は今後のスポーツでは、見る、つまり観客側につこうと思いました。私はあまり運動が得意な方ではありません。だから、その分がんばって走っていたりプレーをしたりしている人がいたら、その人の事を一生懸命に応援していきたいです。